

ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物は
ホームページからお読みいただけます。

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

(各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください)



8TH003

これからの幼児教育を考える 2009 春

「これからの幼児教育を考える」

幼稚園教育要領の改訂、保育所保育指針の改定を受け、乳幼児をとりまく保育の環境は大きく変わろうとしています。このような変化を踏まえ、ベネッセ次世代育成研究所では、よりよい幼児教育のためにお役立ていただきたいと願い、情報誌「これからの幼児教育を考える」を刊行しました。保育に関する調査結果、幼児教育に携わる方へのインタビュー、実践事例などを分かりやすく紹介しています。



2008 夏号

特集
幼稚園教育要領改訂の
ポイント

2008年3月に告示された幼稚園教育要領改訂のポイントを解説。また、幼稚園における子育て支援の実態について、ベネッセ次世代育成研究所が行った調査の結果や現場の実践例を紹介しています。



2008 秋号

特集
幼稚園教育要領改訂を
日々の保育にどう生かす？

幼稚園教育要領の改訂を受け、現場ではどのようなことに留意して保育を展開していくとよいでしょうか。園長先生から寄せられた疑問に答えます。「規範意識」「協同して遊ぶ」という改訂のキーワードを受けた実践の紹介も。

幼稚園教育・保育に関する発刊物

「第1回 幼児教育・保育についての基本調査（幼稚園編）」速報データ集

全国の国公立私立幼稚園の園長・副園長（教頭）・主任の先生を対象に、幼稚園における子育て支援活動や教育活動、教育環境等の実態を調査したデータ集です。（A4判 88ページ）



幼児の遊びに見られる学びの芽

4歳児・5歳児あわせて59の事例から、幼児が豊かな活動を通して、たくさんの気づきを得て、学びを展開させていく様子を実際の事例をもとに分析しました。
著者：磯部 頼子（元全国国立幼稚園長会会長、ベネッセ次世代育成研究所顧問）（A4判 74ページ）



冊子について、ご質問やご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。



フリーコール 0120-933-964

【受付時間】10:00～17:00（日曜・祝日は除く）

※通話料無料 ※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※携帯番号・PHSからもご利用できます。
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6337へおかけください。（ただし通話料がかかります）



これからの 幼児教育を 考える

●特集

幼小連携の充実に向けて
現場が取り組むべきこと

●データから見る幼児教育
幼小連携の現状と課題

●座談会

実りのある幼小連携に向けて

●現場の実践紹介①

園児と児童の主体性を大切に、
お互いが学び合う交流を
（品川区立 平塚幼稚園）

●現場の実践紹介②

幼小の“段差”を
なめらかな“坂道”へ
（学校法人 長津田学園 ながつた幼稚園）



2009 春

目次

特集 1

幼小連携の充実に向けて現場が取り組むべきこと

白梅学園大学子ども学部教授 無藤 隆

データから見る幼児教育 6

幼小連携の現状と課題

「第1回 幼児教育・保育についての基本調査(幼稚園編)」より

座談会 11

実りのある幼小連携に向けて

小学校校長が考える、幼稚園との連携の必要性とその方策

林 恵子 (台東区立田原小学校 校長、台東区立田原幼稚園 園長)

増田 進 (市川市立行徳小学校 校長)

【コーディネーター】

磯部 頼子 (ベネッセ次世代育成研究所顧問)

現場の実践紹介① 16

園児と児童の主体性を大切に、お互いが学び合う交流を

品川区立 平塚幼稚園・品川区立 平塚小学校

現場の実践紹介② 20

幼小の“段差”をなめらかな“坂道”へ

学校法人 長津田学園 ながつた幼稚園・横浜市立 いぶき野小学校

今回の幼稚園教育要領の改訂の重点のひとつとして幼稚園教育と小学校教育の連携があります。それを受けて、幼稚園と小学校ではどのような取り組みをすればよいのでしょうか。中央教育審議会幼稚園教育専門部会で主査を務められた無藤 隆先生にお話を伺いました。



特集

幼小連携の充実に向けて現場が取り組むべきこと

無藤 隆

(白梅学園大学子ども学部教授)

芽生えの教育としての幼稚園教育

幼稚園教育要領の改訂において、家庭との連携・支援と共に強調されていることが幼稚園と小学校との連携です。幼小連携は、今後の幼稚園教育に欠かせない取り組みとなりました。合わせて、保育所保育指針の改定でも同様の小学校との連携の趣旨が盛り込まれています。また、小学校の学習指導要領でも幼児教育との連携が強化されています。これは単に学校種の間をつなぐをスムーズにするということを超えて、幼児教育の公教育としての意義を明確にし、誰もが幼児教育を受け、その成果をもって小学校に進学し、さらにその後の教育へと進んでいくということを受けています。

改正された学校教育法において、幼稚園は「義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」と規定されました(第22条)。これは、小学校から始まる読み書きなどを先取りして教えるという意味ではありません。幼児期にふさわしい活動や体験を通し、生涯にわたる成長の基礎を培うのが幼稚園の役割であることを示したものです。

そのことを「芽生えの教育」と呼ぶことが出来ます。幼児期にふさわしい教育を

行いつつ、それが同時に次の時期への芽となるようにするという意味です。幼児期には思考力、道徳性や規範意識、表現においてもすべての始まりが見られますが、その完成体ではありませんし、組織的明示的な指導によって学習活動を推進するところでもありません。幼稚園は幼児らしい活動をしながらか、そこに暗黙のうちに出現してくる次の時期へ伸びようとする力を育てるところなのです。

その意味で、幼小連携の充実に向けてまず取り組むべきことは、幼児教育そのものの充実を図ることです。幼児期にふさわしい活動を行って、そこから伸びようとする芽を育てるのです。

そのような基礎を培うために重要なポイントは、新しい幼稚園教育要領でも示されました。いくつかの点を挙げてみましょう。

第一は協同性の育成です。子どもたちに共通の目的を見出させて、その実現に向けて協力しながら試行錯誤させるというものです。そこで大事なことの1つは、子どもたちの自発的発想や発意が必要だということです。そうあってこそ、子どもの工夫が出てきます。また、共通の目的がまだ実現していないということ、また、影もかたもないということに意味があります。子どもたちにイメージはあるでしょうから、それを具体化して、どういったものを作るかを共有し、また構想を練る必要があります。それを目指して子どもたちが互いに協力し分担しながら活動を進めていきます。当然どうすればよいか困ることも多いでしょうが、その都度、話し合い、保育者の支援を受けながら行うことで、協力するとはどういうことかを学ぶのです。それは年長の後半の時期に想定されていますが、それを可能にするため、3歳からの丁寧な指導が不可欠です。

第二は規範意識の芽生えについてです。ルールを知り、ルールを守ることを通して、自分の気持ちを調整する力を身に付けられることが求められています。子どもたちが自分のやりたいことをやろうとして、互いに衝突が生まれることがあります。そこで折り合いをつけて、ものの取り合いなら半分に分けたり、順番に使ったり、一緒に遊びにもっていったりしなければなりません。それがうまくいくには、共通のルールや約束事が必要です。例えばごっこ遊びで「お母さん」役は大勢はいらないので、そのごっこの約束の範囲で「おねえさん」役を入れるのは、子どもたちがつくるルールがあるからです。そうは言っても、自分がやりたい気持ちが収まるとは限りません。不満があり、葛藤があります。そこで自分の気持ちを調整し、次の機会にやらせてもらうとか、サブの役だけれど工夫をしながら面白くするなどすればいいのです。

第三に、体験の多様性・関連性に基づく指導を進めることです。子どもの心を動かす体験を数多く可能にするとともに、それらの体験に関連性をもたせるようにします。保育者が用意するのは活動ですが、そこで子どもはそれぞれに体験をしています。体験とは子どもの内面が活動を通して生き生きと動き、そこでかかわる事柄や対象との関係が**ぼう**変貌することを指しています。その**ぼう**変貌に特に注目し、そのような体験を成立させることが指導のねらいです。それが教育課程として意味をなすようにするには、体験が次の活動を導き、そこでの体験と結びつき、子どもの育ちの流れを生み出すようにしていきます。



第四に、園の環境の再検討を行います。屋内外の環境が教材として、どのような潜在的な価値をもつかを再検討するのです。環境を通しての保育とは、単に子どもをどこかに置いて自発的な活動を仕向けられれば可能となる、ということではないのです。環境に置かれた人や物から価値ある学びを得られるように、何を置くか、どうかかわればその価値が引き出せるかを保育者は前もって検討しておきます。改めて自分の園の環境を見直し、どんな学びの価値をもっているか、それを引き出すための活動にはどんなことがありうるか、そこで深い体験が出来るようにするために子どもの主体的な活動をどのようにして可能にするかを考えていきます。

以上の視点から、各園の保育を見直してみてください。それぞれの要素の改善が幼稚園での学びを充実させて、小学校入学後の子どものスムーズな成長へとつながるのです。次に、その小学校へのつながりを特に取り上げて、どう進めたらよいかを整理します。

幼小連携は子ども同士の交流から

子ども同士の交流は何より、幼児にはあこがれを、小学生には世話をし導く経験を用意するものです。特に幼児は年齢が上の子どもがしていることを見て、そうやってみたいと思い、試していきながら、自分のものにしていきます。ところが、年長になると、上の子どもに出会う機会がほとんどありません。その意味ではたまに会うのではなく、あこがれ、モデルとして学び、まねできるように、何度も交流をする必要があります。異年齢の交流なので、進学先にこだわらず、近隣同士は頻りに、遠いところは時々でもよいでしょう。もちろん、幼保、公私双方を含めるべきものです。

交流にあたっては、必ず相互にとっての教育的意義・ねらいをはっきりさせ、対応しながら相互の指導計画を作ります。交流場面と単独で自校・自園で行う活動を

無藤 隆 (むとう たかし)
白梅学園大学子ども学部教授。
お茶の水女子大学生生活科学部教授
などを経て現在に至る。中央教育
審議会では教育制度分科会、初等
中等教育分科会などで委員として
活躍。専門は発達心理学・教育心
理学、幼児教育・学校教育。著書
に『ここが変わった! NEW幼稚園
教育要領・保育所保育指針 ガイ
ドブック』(フレーベル館)、編著
に『THE保育—101の提言』(フレ
ーベル館)など。



織り交ぜるとよいでしょう。それを年間計画に位置づけます。その際、繰り返し会い、子ども同士が親しくなり、互いを理解できるようにします。

教師と保育者の交流を深める

幼保の保育者と小学校側の教師は保育・授業をともにつくる中で相手への尊重心と共に理解を進めていきます。相手を理解し、相手から学ぶという姿勢が大切です。相互に意味のあることをしていますが、発達の段階の違いにより、そのやり方が異なるという理解です。その上で、どういった意味で今のようなやり方をしているかを学びます。

具体的には、打ち合わせの時間を前もって確保することが必要です。それぞれ忙しいので、前もって時間を入れておかねばなりません。また、共に研修・勉強会を行うのですが、なるべく参観を含めていきます。その参観は1時間のみならず、朝から帰りまでの全容を知るように努めます。解説をつけてもらうとさらに理解が深まります。もっと踏み込めば、互いに参加してチーム保育・授業を行うとか、さらには、人事交流を進め、体験的な理解につなげていきます。

幼小の間の情報交換

幼保での子どもの様子を小学校に伝え、指導の参考にしてもらうのが「指導要録」の送付です。正確に言うと、幼稚園の指導要録は教育課程の成果の記録であり反省のためのものです。その年長児のものを小学校に送り参考にもらいます。保育所保育指針においては、保育所児童保育要録を小学校への参考資料としてまとめて送ります。いずれにせよ、小学校側から見れば、幼保の双方から来るので、どの子



どもについても幼児期の情報が手に入ることになります。なお、これは個人情報保護法の例外規定になります。今後、小学校低学年で学級崩壊や学級の混乱などが生じて、小学校としてしかるべき情報を手に入れて、対応した指導をきちんと行っているかという責任が問われることになります。

実際には要録の情報だけではよく分からないところも多いので、担当者同士が顔を合わせて話し合うことも増えてきました。幼保小の合同の協議会を設置して、日ごろから、または年度末などに話し合いをします。

一貫したカリキュラムへ

幼小のなめらかな接続を実現するためには、幼稚園から小学校への学びの連続性を考えたカリキュラムのつながりをつくる試みも大切です。特に三つの軸で考えてみてはどうでしょうか。

第一が自己と社会性の育ちの軸です。自己抑制・気持ちの調整の成長を核とします。道徳、特別活動などへと発展させていきます。

第二が学びの芽生えの軸です。体験の多様性・関連性から学びの筋道をつくり出します。後々に教科の内容の芽生えとなる感覚を養い、発達の流れを幾筋も育てます。幼児教育は芽生えの教育であり、教科などの教育の体験的基盤となるところなのです。

第三は協同性の育ちの軸です。幼児期の協同的な遊び・学びの活動から、小学校の授業での活動の基本と生活科その他の活動へと発展させていきます。

接続期カリキュラムを作る

5歳の後半から小学校1年生前半の移行を徐々にステップを踏んで進める必要があります。互いに調整しつつ指導体制・活動内容・指導事項をいつ導入するかを個別に幼保小が集まる中で検討します。地域や家庭、またその地域の幼稚園や保育所の特徴によって具体的な内容は変わっていくでしょう。小学校における適応指導や生活科を中心としたスタート・カリキュラムへとつなげます。その際、小学校1年生の4月・5月の授業の単位時間や活動内容を幼児期からの流れを意識して組み立てますが、同時に幼児教育の年長3学期あたりを中心に小学校に向けての指導を加えます。

以上に述べたように、幼小連携に向けてまず充実させるべきは、幼児期にふさわしい活動を通した幼児教育そのものの充実にはかなりません。そして、幼稚園と小学校の連携のみならず、保育所も加えた三者の連携を進め、幼児期の教育の成果が、小学校に進学しその後の教育につながっていくことが大切と言えるでしょう。

幼小連携の現状と課題

2009年度から実施される新しい幼稚園教育要領では、幼稚園教育から小学校教育への滑らかな移行が重視する事柄の一つとして挙げられました。ここではベネッセ次世代育成研究所が行った「第1回幼児教育・保育についての基本調査（幼稚園編）」（2007年6月に全国の国公立幼稚園を対象に実施）の結果から子ども同士、教員同士の交流の現状を紹介するとともに、幼小連携を進めるうえでの課題を考えていきたいと思います。

調査概要

【テーマ】

国公立・私立幼稚園の教育活動、子育て支援活動等に関する意識・実態調査

【方法】

郵送法
（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

【時期】

2007年6月

【対象】

・全国の園児数30人以上（一部、園児数不明の園も含む）の国公立幼稚園の園長・副園長（教頭）・主任の先生（1園につき1名が回答）
・発送数、回収数（有効回答数）、回収率は下の通り

	合計	国公立	私立
発送数	7,100	1,420	5,680
回収数（有効回答数）	1,604	401	1,203
回収率	22.6%	28.2%	21.2%

園児・児童の交流の有無と内容

国公立の84.5% 私立の58.4%が小学生との 交流活動をしたことがある

幼児の地域の人との交流を尋ねたところ、国公立で最も多いのは「小学生」との交流で84.5%でした。一方、私立でもっとも多いのは「中学生・高校生」との交流で67.3%です。一般的に国公立のほうが私立よりも小学生との交流活動が多いのは、設置母体となる自治体が活動を促進していることも背景にあるようです。また、小学校に比べると少ないですが、保育所の乳幼児との交流も国公立では36.7%、私立では9.1%が行っています。就学する小学校が同じになることもあり、幼児同士のかかわりを深めておくことが大切であると言えるでしょう。

図1 地域の人との交流

設問：貴園の園児は、次にあげる園外の人たちと交流活動をしたことがありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

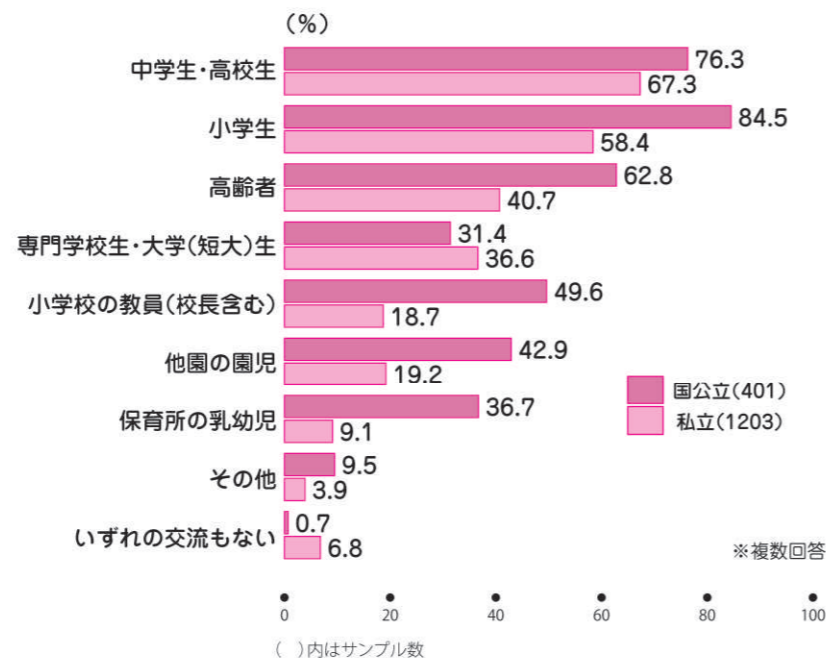
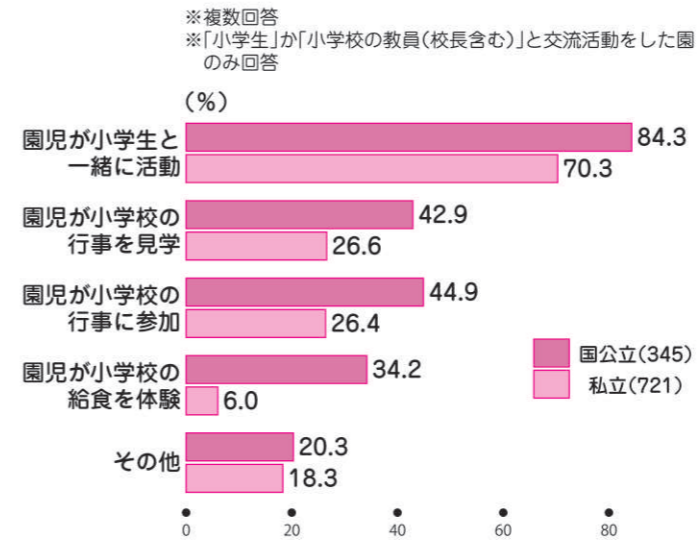


図2 小学校との交流活動

設問：どのような交流や活動の場がありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。



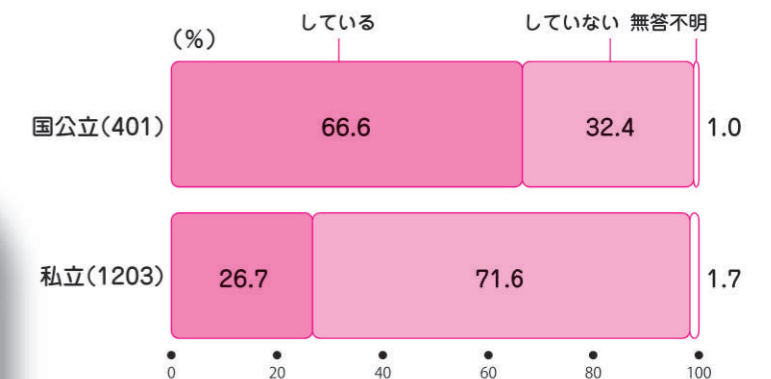
小学生と一緒に活動する交流が最も多い

交流活動をしたことがある園に、園児と小学校とのかかわりはどのようなものであったかを聞いたところ、最も多かったのは「園児が小学生と一緒に活動」でした。

園児が小学生と一緒に活動を通して、お兄さん・お姉さんにあこがれをもち、入学を心待ちにできるような機会をつくることが望まれていると言えるでしょう。

図3 幼稚園と小学校の教員の交流活動の有無

設問：貴園の教員と近接の小学校の教員は、研修またはスポーツなどで交流をしていますか。あてはまる番号に○をつけてください。



教員間の交流の有無と内容

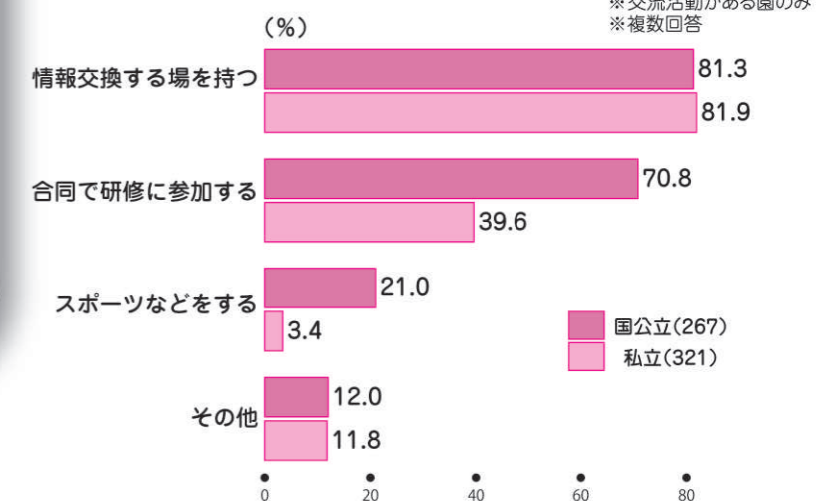
教員間の交流は、 国公立の66.6% 私立の26.7%が実施

教員間の交流については、国公立の66.6%、私立の26.7%が交流しているという結果となりました。また、具体的な交流の内容を聞いたところ、「情報交換する場を持つ」との回答が国公立で81.3%、私立で81.9%と最も多いことがわかりました。

子ども一人ひとりの発達の状況や課題について、幼稚園から小学校に伝えたり、保育や指導の目的や内容を情報交換したりするなど、教員同士が互いの理解を深める努力をしている様子が見えがえす。

図4 交流活動の内容

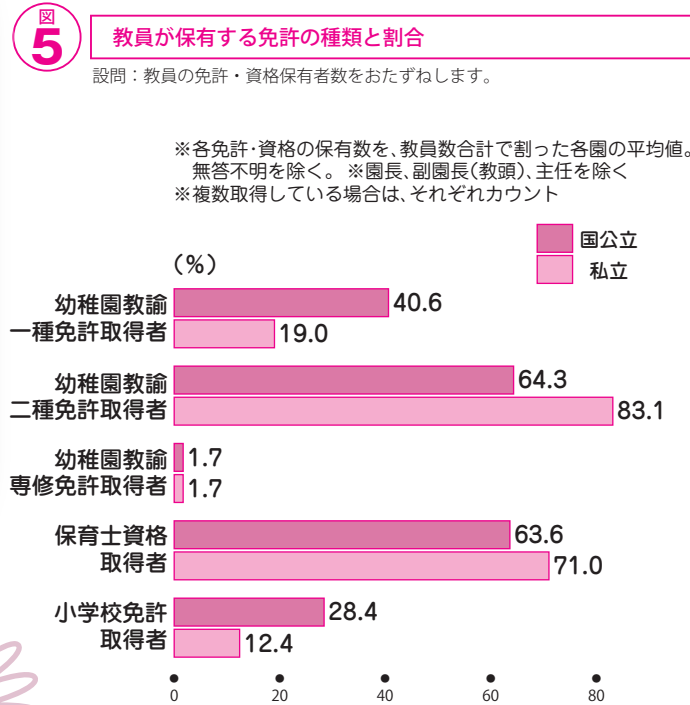
設問：どのような交流がありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。



教員の免許および資格の取得状況

国公立の約3割、私立の約1割が小学校教員免許を取得している

幼稚園教員で小学校免許をもっているのは国公立で28.4%、私立では12.4%であることがわかりました。一方、幼稚園教員の6割以上は保育士資格を取得しています。保育士資格取得者が多い背景には、幼保合同など将来を見据えた設置者の意向も大きいようです。今後の幼児教育の充実に向けて、複数の資格・免許をもつことで子どもへの理解が深まることも期待したいものです。

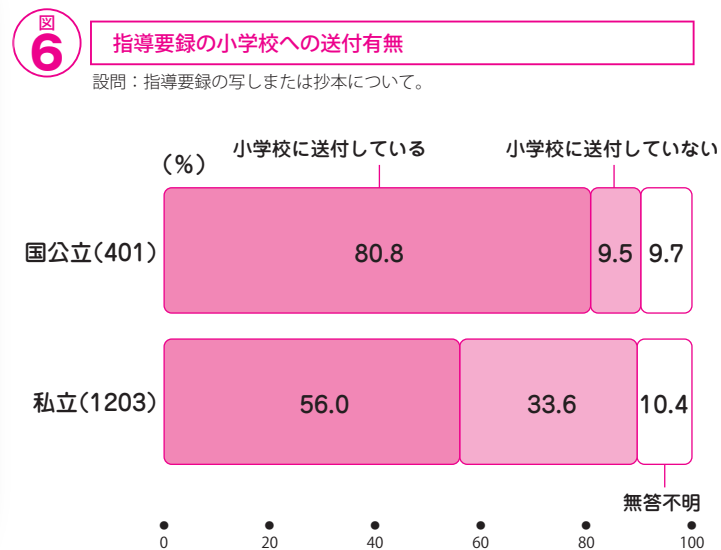


指導要録の送付

指導要録は国公立の約8割、私立の約6割が小学校に送付している

今回の調査では、国公立の80.8%、私立の56.0%が指導要録の写しまたは抄本を小学校に送付していることがわかりました。就学に際して幼稚園からは指導要録を送付することになっていますが、送付していない園では、書面ではなく、教員同士が直接情報を伝える方法を重視していることもあるようです。

指導要録を送付するとともに、相互の話し合いにより、子どもの理解を深めていくことが大切と言えるでしょう。



参 考 デ ー タ 集

幼小連携に関するお茶の水女子大学 子ども発達教育研究センターの調査結果から、具体的な交流の内容や課題についてご紹介します。

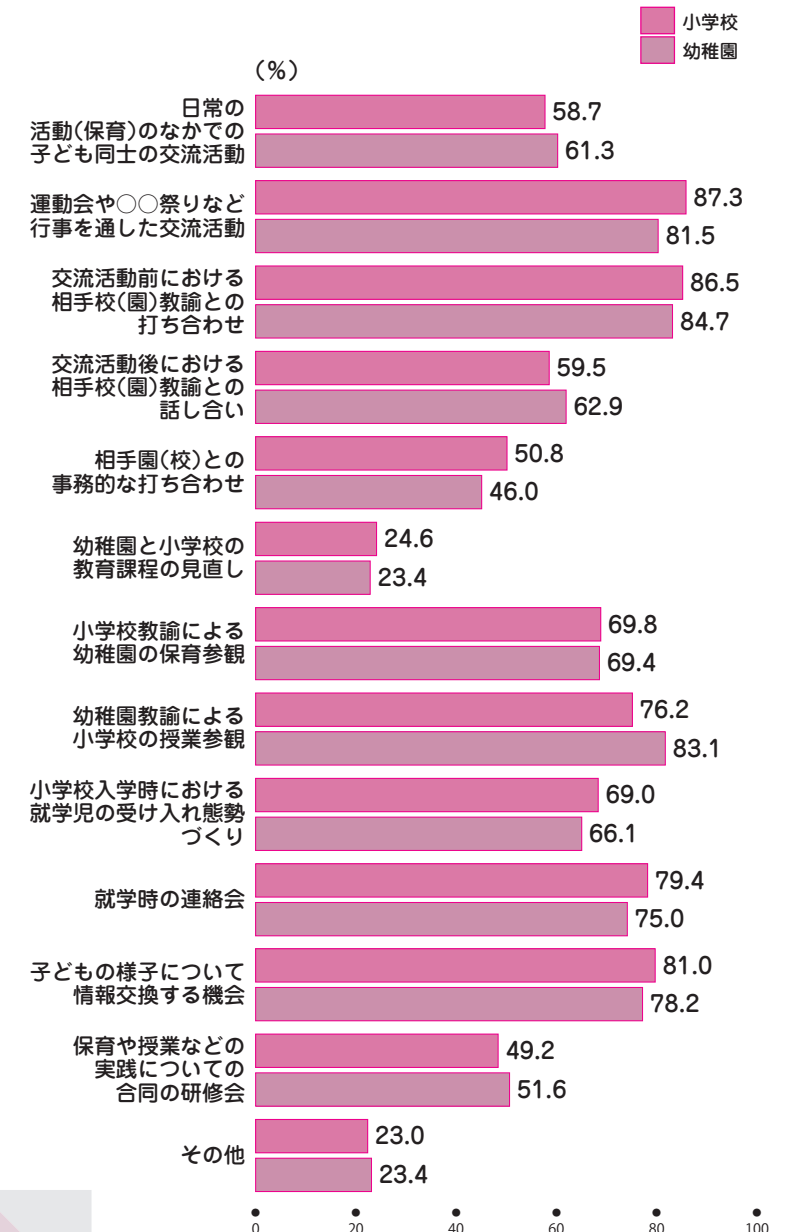
1

全体的に行事や授業参観などイベント型の交流が多い傾向

子どもの交流内容について右の参考データを見ると、「運動会や〇〇祭りなど行事を通じた交流活動」が最も多く「日常の活動(保育)のなかでの子ども同士の交流活動」よりも多くなっています。当研究所の調査(7ページ・図2)でも、園児が小学生と一緒に活動したり、小学校の行事に参加したりするなどの活動が多いことがわかりました。どちらも似たような傾向が見てとれます。一方、教員同士においては、「交流活動前における相手校(園)教諭との打ち合わせ」「幼稚園教諭による小学校の授業参観」「就学時の連絡会」「子どもの様子について情報交換する機会」などが多くなっています。当研究所の調査(7ページ・図4)では具体的な内容の調査をしていませんが、「情報交換する場を持つ」という回答の内訳には、以上のような交流活動が含まれるのではないかと推察されます。



図A 幼小連携の取り組み



調査の概要

【調査時期】
2003年12月中旬～下旬

【調査対象】
全国の都道府県および政令指定都市の教育委員会にリストアップを依頼し、紹介された幼小連携実践校・園(小学校210校、幼稚園190園)

【調査方法】
郵送法による質問紙調査

【対象小学校・幼稚園の概要】
小学校126校、幼稚園125園から回答を得た(回収率62.7%:小学校60.0%,幼稚園65.8%)
※対象校・園の概要

	小学校	幼稚園
公立	123校 (98%)	102園 (82%)
私立	1校 (1%)	20園 (16%)
国立	2校 (2%)	2園 (2%)

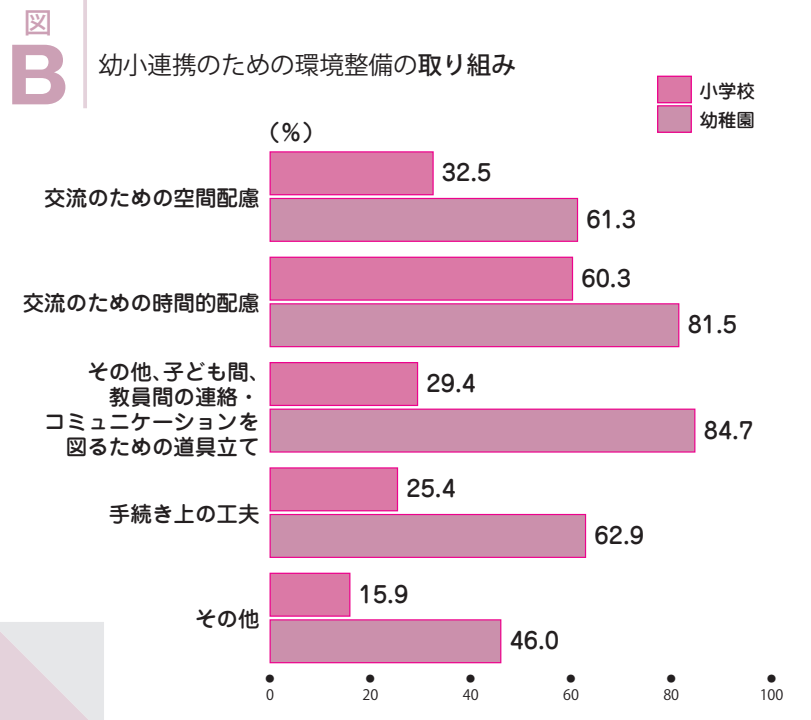
●引用文献 「幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー」(お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター 2005年9月発行)

●引用文献 「幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー」（お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター 2005年9月発行）

2

幼稚園の方が環境整備に対しては熱心な傾向

連携のために取り組んでいる環境整備については、幼稚園では子ども間、教員間の連絡・コミュニケーションを図るための道具立て」が最も多いのに比べ、小学校では「交流のための時間的配慮」が最も多いことがわかりました。日々の活動の計画については、比較的自由度が高い幼稚園に対して、小学校ではカリキュラムは教科教育を中心に綿密に組まれており、その中に連携活動を入れ込んでいくことに難しさを感じているようです。

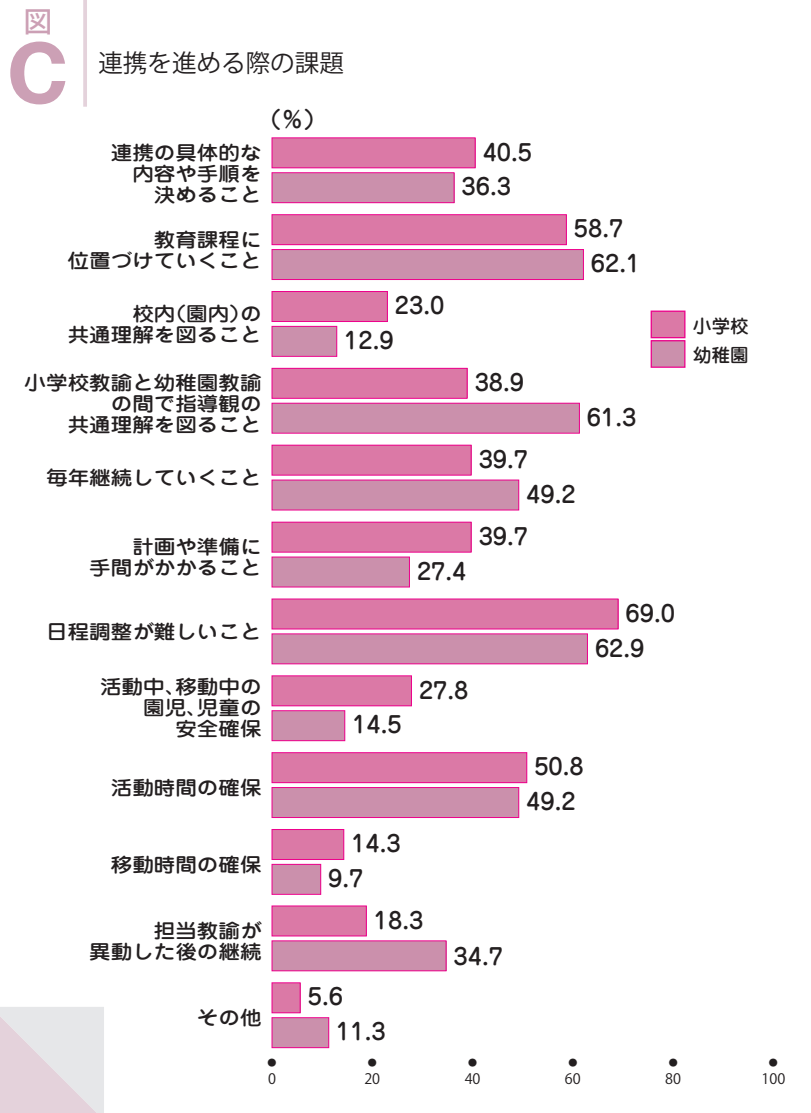


3

最も難しいのは日程調整、次いで教育課程に位置づけていくこと

連携を進める際の課題として、幼稚園・小学校ともに最も多く選択されたのは「日程調整が難しいこと」でした。次に多いのも両者とも共通して「教育課程に位置づけていくこと」でした。双方とも、日々の授業・保育カリキュラムを実践していく中で、互いの都合を調整する難しさを感じているほか、幼稚園教育と小学校教育をつなげる教育課程の編成に困難さを感じていることがうかがえます。

また「小学校教諭と幼稚園教諭の間で指導観の共通理解を図ること」という項目の選択に小学校と幼稚園で差がみられました（小学校38.9% 幼稚園61.3%）。この項目は幼小の移行を考えた時、大きな「壁」と言えるでしょう。そして、これを乗り越えるために子ども達の発達の連続性を考慮して双方で努力し合っていくことが期待されます。



座談会

実りのある幼小連携に向けて

小学校校長が考える、幼稚園との連携の必要性とその方策



今回の幼稚園教育要領改訂では、小学校とのつながりが強調され、子ども同士の交流や教師の連携が求められています。幼稚園教育が小学校以降の学習や生活の基盤をはぐくむことを踏まえ、小学校が幼稚園の教育に期待することは何でしょうか？

今回は、お二人の小学校校長をお招きし、小学校側の視点から幼小連携の必要性や、そのための方策について語っていただきました。

磯部 頼子

ベネッセ次世代育成研究所顧問
元全国公立幼稚園長会会長

増田 進

市川市立行徳小学校 校長

林 恵子

台東区立田原小学校 校長、
台東区立田原幼稚園 園長

■学校プロフィール

千葉県市川市立行徳小学校

校長◎増田 進先生
児童数◎983人
学級数◎32学級（うち特別支援学級5学級）
所在地◎〒272-0115 千葉県市川市富浜1-1-40
TEL◎047-357-3116
<http://www.gyoutoku-syo.ichikawa-school.ed.jp/top/>

東京都台東区立田原小学校

※敷地内に台東区立田原幼稚園を併設。

校長◎林 恵子先生
児童数◎443人
学級数◎13学級
所在地◎〒111-0034 東京都台東区雷門1-5-14
TEL◎03-3841-1656
<http://www.taitocity.net/tawara-es/>

近年の子どもの 実態から浮かび上がる 幼稚園と家庭の連携の必要性

磯部：本日はよろしくお願ひします。近年、小1
プロブレムが問題視されていますが、まずは最近
の1年生の実態についてお聞かせください。

林：本校の敷地には区立幼稚園が併設されており、
私は小学校の校長と園長を兼任しています。併設
園の子たちは、日ごろの交流による慣れから、小
学校への接続は比較的スムーズですが、他の園か
ら入学する子たちは環境の変化に戸惑うことが少
なくありません。とくに幼稚園に比べ、授業以外
の点で言うと校舎が大きい、廊下が幼稚園ほど明
るくないといった変化も原因のようです。

増田：確かに、環境の変化は1年生が最初につま
ずくポイントでしょう。ただ、1学期が終わるこ
ろには、だいぶ慣れてくるようです。

磯部：最近の子どもの精神面や生活態度はいかが
でしょうか。

増田：ベテラン教師の集まりで、最近の子どもの
特徴を聞く機会がありました。その話を総合する
と、プラス面としては、聞き分けがよく、物怖じ
をせず、とくに大人との関係づくりがうまい。ま
た未知の物事への意欲が比較的高く、情報量の多

さは昔の子とは比べものになりません。保護者の
指導によって清潔面に気遣う子どもが増えている
のも特徴でしょう。一方、マイナス面としては、
自分の要求を口に出せない子が多いようです。「ト
イレに行きたい」「プリントが回ってこない」とい
った簡単なことすら言えず、黙って待ってしまう。
そのほか、体格はよいけど、姿勢が悪い、うまく
走れなくて転びやすいといった身体的な特徴、更
に食生活では偏食や少食、食べるのが遅いなどの
傾向がうかがえます。

林：本校にも自分の意思を表現できず、代わりに
手が出てしまう子があります。逆に、自分について
必要以上に話す反面、他人の話をほとんど聞けな
いという問題を抱える子も見られます。こうした
問題は幼児期に現れますから、園の活動では個に
対応する指導を心がけていますが、やはり保護者
の育児に対する考え方に大きく左右されるのは否
めません。例えば、入学式などで、「今年の保護者
は静かに話を聞いている」と思ったら、その子ど
もたちも落ち着いていたり、逆にどちらも話を聞
けない学年があったりして、保護者や家庭環境の
影響の大きさを実感します。それだけに、幼稚園
と家庭との連携は重要ですね。

磯部：幼稚園や保育所など、就学前の施設による
育ちの違いは感じますか。

林：本校の児童の約4分の3は、併設園以外の幼
稚園や保育所から入学しますが、各園の方針によ
って育ちに若干の差を感じるの確かです。しかし、
それ以上に家庭環境の方が関係しているでしょう。

増田：同感です。入学当初は、保育所を出た子
のほうが、親と離れる時間が長かったためか、多少、
たくましさを感じますが、1学期を過ぎると、ほ
とんど差は見られなくなります。一方で、家庭環
境の差は本当に大きいです。例えば、就学前に塾
や習い事に通ったかどうかによって、子どもの知
識や体力はまるで異なりますから。しかも、近年、
就学前教育に対する保護者間の意識の開きがあ
ます広まっているのを感じます。

幼児期に求められるのは 文字や数の知識よりも 基本的な生活習慣の習得

磯部：幼稚園児の保護者が気にすることの一つが、
就学前に文字や数を教えたほうがよいかどうかと

いうことです。そのことに関して、幼稚園の先生
方が質問されることは多いのですが、先生方はど
のようにお考えでしょうか。

林：入学時に文字を書けるか、あるいは数を数え
られるかは、本校の教師はまったく気にしていま
せん。入学後に学び始めればよいと考えています。
ただ、以前、幼稚園を対象にしたアンケートを通
じて、文字や数の指導に力を入れる園が多いこと
を知りました。その意味では、小学校と幼稚園お
よび保護者との間には認識のズレがあるのもし
れません。

増田：私は、むしろ就学前には文字や数を教えな
いしてほしいと思っています。というのは、文字の
場合、筆順まで覚えていないことが多く、結局、
小学校で直さなければいけませんし、数にしても、
100まで数えられるかどうかは小学校での算数的
な力とはあまり関係がありません。それよりも、
服の脱ぎ着やトイレのマナーなど、生活習慣の指
導に力を入れてほしいというのが本音です。

磯部：保護者に対し、そのような情報を周知する
必要がありそうですね。

増田：そうですね。学区内の公立幼稚園では入学
直前の毎年2月に説明会を行い、「自分の名前が読
めて、10まで数えられれば十分」とお話ししま
すが、保護者からは「もっと早く言ってほしかった」
という反応を感じるがあります。幼稚園の先
生方も文字や数は習わなくてよいと話されるので
しょうが、他の子に差をつけられたくないという
思いから、「幼稚園の先生はそう言うけど、実際は
違うかもしれない」と受け取る保護者も、おそら
くいるのでしょう。小学校の教員が直接話せば説
得力が違いますから、年度の初めくらいに説明会
を設けるのがよいかもしれません。そうすれば、
保護者が必要以上に焦ることもなくなるでしょう。
林：私の園では保護者に対し、小学校、さらには
中学校の教育を見越して、「今の時期に何をするべ
きか」ということを、お話しています。併設園な
らではの利点かもしれませんが、そのような説明
によって保護者に安心感をもってもらえるのは確
かだと思います。

磯部：幼小連携においては、子ども、教員、そし
て保護者による相互交流が考えられますが、先生
方の小学校では、現在、どのような活動をされて
いますか。

林：子ども同士の交流としては、生活科や特別活
動を通してふれ合うほか、合同で運動会、音楽会、
学芸会などを行っています。一方、職員同士では、
小学校教員が幼稚園の工作や音楽を教わったり、

逆に幼稚園教員が小学校の研究授業に参加したり
する活動をしています。また私立幼稚園からの要
請を受け、私が小学校校長として家庭教育学級な
どでお話することもあり、これも連携の一環です。

磯部：それは充実していますね。増田先生の学校
は大規模校ですので、難しさもあるのではないで
しょうか。

増田：そうですね。公立幼稚園はまだしも、私立
の幼稚園や保育所との連携活動は、お互いに相当
の労力を要するのが現実です。いろいろな制約を
乗り越えて充実させたいとは思っていますが。

幼稚園での表現活動を踏まえた 小学校の授業改善が進行中

磯部：今回の小学校学習指導要領の改訂では、生
活科や国語、音楽、図工において、幼稚園での表
現に関する活動を踏まえての指導が求められてい
ます。この点について、今後、指導上からどのよ
うな可能性が考えられますか。

林：幼稚園での活動が小学校の教科指導につな
がる場面は多々あります。例えば、小学校の低学年
ではさまざまな植物を育てていますが、幼稚園で

増田 進先生
(千葉県市川市立行徳小学校 校長)

林 恵子先生
(東京都台東区立田原小学校 校長、
台東区立田原幼稚園 園長)

も年少から年長にかけて栽培を体験します。その際の気付きや感動を踏まえることにより、小学校での指導はより充実しますが、そのためには小学校教員が幼稚園での活動内容を十分に理解し、何を生かし、伸ばすべきかを意識するのが不可欠です。その点では、本校の取り組みは、まだまだ不十分と言わざるを得ません。そこで、相互理解の一環として、学期に一回の「幼小中交流の日」を実施しています。これは台東区が5年前から始めた取り組みで、お互いの活動や授業を見学したり、協議会を開いて話し合ったりしています。

磯部：幼小の交流により、どのような効果が生まれていますか。

林：一例ですが、小学校教員が、園庭での子どもの遊びを指導する幼稚園教員の姿を見て、「しっかりと一人ひとりを見ているのだな」と感心していました。幼小の指導の違いを理解することは非常に大切です。例えば、1年生を受けもった教員が、算数の時間に課題が早く終わった順に、教室から離れている図書室に行くのを許可したことがありました。しかし、一人ひとりを自由に行動させるのはまだ早く、子どもたちが廊下を走り出すなどして混乱してしまいました。もし幼稚園での指導を理解し、意識していれば、きっと皆が終わるまで待たせてから図書室に連れて行ったでしょう。

増田：そのお話を聞いて、幼児期の一人ひとりに応じた指導の大切さを踏まえたうえで、その時々が発達段階に応じた指導を検討することの大切さを改めて感じました。

磯部：幼小連携を円滑にするのに役立つもの一つに、幼稚園から小学校に送付される指導要録があります。ベネッセ次世代育成研究所の調査では、国公立の9.5%、私立の33.6%が送付していませんでした（8ページ、図6参照）。法的に裏付けされているにもかかわらず、送付率が低い理由としては、小学校から「必要ない」「参考にならない」と言われたことなどがあるようです。送付するのが目的で作成するわけではありませんが、先生方の小学校では、指導要録はどのように取り扱っていますか。

林：送付期限が3月末日のため、多くの園の指導要録がクラス編成に間に合わないのが実情です。そこで、教員が手分けをして、訪問や電話によって子どもの情報を集めてクラス編成に役立て、指

導要録は、入学後、子どもの育ちを改めて確認するのに用いています。もう少し早く送付してもらえると、活用の幅が広がるのですが。

増田：子どもたちの様子ももっと具体的に分かる記述があると助かりますね。本校のクラス編成では、就学時健診などで子どもたちの様子を参考にすることが多いです。

養育環境の問題から生活習慣などが身に付かず特別な支援が必要になることも

磯部：続いて、特別な支援を要する子どもへの対応について、お聞かせください。最近、特別に支援を必要とする子どもが増えているという話を耳にしますが、小学校での実態はどうでしょうか。

林：いわゆるLD（学習障がい）やADHD（注意欠陥・多動性障がい）などに該当する子どもは昔から一定数存在すると思います。それとは別に、最近では養育環境に起因するケースが増えているのではないのでしょうか。育児に問題があったり、また愛情を十分に感じられずに育ったりすることなどから、我慢したり、人と上手にかかわったりできず、手厚い対応が必要となる子どもです。小1プロブレムが問題視される背景には、そのような状況も関係しているのではないかと思います。

増田：本校では特別支援教育部会を組織し、個別

指導計画を作成して対応していますが、その支援に際して、しばしば困難を感じるのが保護者との関係です。保護者が協力的な場合は問題ありませんが、こちらが専門機関などへの受診を勧めても頑として拒否されることも珍しくありません。その場合の説得は非常に困難です。

林：本校でも同じ悩みを抱えています。そのような保護者の中には、幼少期の子どもの養育を放棄するような、特殊なケースもあるようです。

増田：小学校としては、そうした成育環境は切実に知りたい情報です。ある程度、保護者との関係が構築できる前には、なかなか、そこまでの話には踏み込めません。ですから、育児などに関し、幼稚園の段階で保護者とどのような関係を築いてきたかという情報交換ができると非常に助かります。こうした点でも、幼小連携は必要でしょう。

幼稚園教育で培われる生活習慣や規範意識が義務教育以降の土台になる

磯部：このたびの学校教育法の改正により、幼稚園においては、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」という幼稚園教育の目標が明確になりました。現在、幼稚園では教育課程の見直しや再編成が進められていますが、小学校など義務教育以降の学校生活に円滑に移行させるために、幼稚園教育ではどのようなことをはぐくんでほしいとお

考えでしょうか。

林：基本的な生活習慣や規範意識が身に付いている子どもほど、学習意欲や国語や算数の正答率が高い。このことは文部科学省の調査結果（H19年度全国学力・学習状況調査）などにも表れていますし、私自身も実感しています。幼児教育では、こうした生活や学習の基盤の育成に力を注いでほしいですね。同じように大事なのが、体力ややる気、興味・関心。そして、いかに驚きや感動を体験しているかということです。これらは、小学校でのさまざまな領域における学びの土台になると思います。

増田：おっしゃる通りだと思います。朝食や睡眠時間といった生活習慣と学力には相関関係があると思います。当たり前のことですが、午前中から空腹や眠気に襲われては勉強に身が入るはずがありません。しかし、残念ながら、その当たり前のことができない家庭が増えているのが現状です。家庭での育児に深くかかわることですから難しさもありますが、幼稚園の先生方にも意識していただきたいと思います。それから、幼稚園とは違い、小学校では評価が導入されます。仮にテストの点数が悪い場合、くじけたり、投げやりになったりせず、努力しようと頑張れる力は、幼いころから達成感を積み上げていくことで培われます。さらに、私たち小学校の努力も必要ですが、幼小連携による異年齢との交流では、人とのかかわり方が身に付くでしょう。これもその後の人生において、とても大切なことだと思います。

磯部：最後に幼稚園の先生方に向けて、応援のお言葉をいただけますか。

林：小学校入学前に培った習慣の一部は、なかなか修正できません。いかに幼児期の教育が大切かということでしょう。義務教育ではありませんが、その前段階として不可欠な教育であることを意識し、自信をもって取り組んでいただきたいと思います。

増田：一人ひとりの個性に目を向けて豊かな愛情を注ぐ幼稚園教育は、とても素晴らしいものだと思います。きっと子どもたちにとって一生の財産になるでしょう。小学校でも個性を伸ばす教育を大切にしていますが、幼稚園の先生方の姿勢や愛情からは多くのことを学ばなければならないと感じています。

磯部：具体的なご示唆をたくさんいただきまして、どうもありがとうございました。



磯部 頼子顧問
(ベネッセ次世代育成研究所)



座談会 ● 実りのある幼小連携に向けて

●交流内容

国語 伝えよう 音の響き

現場の実践紹介①

園児と児童の 主体性を大切にお互いが学び合う 交流を

言葉のリズムにふれながら、
楽しい出会いの場に



幼稚園
品川区立
平塚幼稚園

人間尊重の精神に基づき、心身ともに健康かつ知的で感性に富んだ人間性豊かな幼児の育成を図ることを教育目標に掲げている。保育園や小・中学生・地域のさまざまな人々との交流を積極的に取り入れることにより、人とかかわる力をはぐくむことに力を入れている。

園長●風間 美絵子先生
所在地●〒142-0063 東京都品川区荏原4丁目5番22号
園児数●66人(2クラス・2年保育)



小学校
品川区立
平塚小学校

確かな学力と豊かな人間性・社会性を育てることを目標に、小中一貫教育の推進や幼小の連携を計画的に行っている。また、全教員がチームを組んで指導や研究を行う体制をとることで、教育活動の質や教師の指導力の維持・向上にも取り組んでいる。

校長●岸 達也先生
所在地●〒142-0063 東京都品川区荏原4丁目5番31号
児童数●204名(7学級)



同じ敷地内に設置された平塚幼稚園と平塚小学校。交流を行う際に大切にしているのは、「子どもの主体性を大切にする」こと。5歳児と4年生という年齢の幅も大きい交流において、園児と児童それぞれが主体的に活動するには、どのような働きかけが必要なのでしょう？

これまでの取り組み

平塚幼稚園と平塚小学校は、同じ敷地内に設置され、以前からイベントなどを通じた緩やかな交流がありました。近年は、その取り組みが本格的になり、幼小の教員が共同で指導案を作成し合同の活動を行うなど、教育内容や子どもの発達の理解もできるような取り組みも行われています。また、平塚幼稚園には、小学校の先生が気軽に立ち寄って相談できるようなスペースもあり、子どもたちの日ごろの様子を話し合うことも頻繁に行われています。

今回の交流活動について

今回の交流は、互いに初めて出会うことになる5歳児と4年生が、まずは出会いの場を楽しむことを共通のねらいとしました。さらにそれぞれに次のようなねらいをもって、交流をしています。

《5歳児》

- ・小学生の先生やお兄さん、お姉さんに親しみをもつ。
- ・小学生の群読を聞き、雨の降る様子を自分なりにイメージして楽しむ。

《4年生》

- ・幼児に情景が思い浮かべられるように強弱や速さ、リズムに気をつけて詩を群読する。
- ・幼児が考えた豊かな音の表現の仕方を知り、心を豊かにする。

交流授業までの取り組み

5歳児

「あめ」の歌や実際の雨の音にふれることで音や表現の多様さに気付く。

5歳児は「あめ」の歌を小学生に聞いてもらうことになりました。それまでに、雨天のときに傘をさして園庭を散歩し、傘や木の葉、遊具にあたる雨の音を感じたり、水たまりの様子を観察したりすることで、雨を実際に体験する機会を何回か設けました。園児によっては、雨の強さや、立っているときとしゃがんでいるときでは、雨の音が異なることに気付いているようでした。

小学4年生

発表したいという気持ちを大切に詩の群読を練習する。

4年生は「てるてるぼうず」「あめ」のふたつの詩の群読の練習をしました。誰に発表をするかについてみんなで話し合い、今まで発表を聞いてもらったことのない身近な存在として、隣設園の園児に聞いてもらうことに決定しました。「幼稚園の子にもわかりやすく伝えるにはどうしたら？」と話し合い、朗読の強弱や速さを工夫しました。

当日の様子

日時：2008年6月25日(水)
場所：小学校 図書館



あいさつをしてから、園児はゴザの上に着席

あいさつを交わして着席。小学校の先生から「今日は、きりん組(5歳児)と4年生と一緒に国語のお勉強をします」と言われると、背筋がしゃんとする子も。



ざんざかざんざか

11:00

11:10

4年生の群読をじっと聞く園児たち

群読を聞くという初めての体験に、園児は真剣なまなざしで4年生を見つめています。4年生は、先生の指揮に合わせて、強く弱く、速く遅く詩を朗読していきます。指揮をする先生を振り返って、じっと見つめる園児もいます。



群読を聞いて、どうでしたか？

「すごかった！」
「言葉が速かった」
「なんか、不思議な感じがした」
「声がそろって、きれいだった」
「言葉がおもしろかった」

ぴちぴち
ばしゃばしゃ

11:20



「あめ」の歌を発表する園児たち

♪

次は園児たちが「あめ」の歌を発表する番です。歌う前に幼稚園の先生が4年生に「歌の中に出てくる『雨の音』の表現を後で発表してもらいますので、よく聞いてくださいね」とねらいを伝えますが、歌い終わってから尋ねても反応がすぐには返ってきません。もう一度園児が歌うと、「ぴちぴち？」「ばしゃばしゃ？」など、少しずつ発言がでてきました。園児たちもうれしそうに「あたり！」などと拍手をしています。また、「弱い雨」「やさしい雨の感じ」という感想もありました。

幼稚園の先生が「雨の音はどんな音かわかった？」と尋ねると、園児たちは「ざんざか…」「ざんざん…」と答えました。迫力を感じているようです。次に、「雨の日のお散歩に行ったときはどんな音が聞こえたかな？」と尋ねると「ぼつぼつ」「ざーっ」「ぴっちゃん ぴっちゃん」などと答え、4年生の群読に出てきた雨の音の表現との違いを感じているようです。今度は幼稚園の先生が4年生に『『ざんざか』とは、どんな雨なのかな？』と聞くと、「激しい音」という答えが返ってきました。その答えに「ふーん」と納得する園児もいます。

2回目の群読を聞く

「どんな雨が降っているのか、想像しながら聞いてみようね」

「工事現場にいるみたいな感じがした」
「最初は雨がちょっとだけ降っていて、だんだんたくさん雨が降っているようだった」

群読を2回聞いた後に感想を尋ねると、園児からは雨の世界をより広げた、具体的なイメージの言葉がたくさん出てきました。「今日は幼稚園で感じているのとは違う、雨の世界に来ることができたね」と言うとうなずく園児たち。

11:30

お互いにお礼を言い、4年生と手をつなぎ園まで送ってもらいました。

その後の交流

今回の交流の後、園児のもとには、4年生からお礼の手紙が届きました。「楽しかったよ」「歌、じょうずだったね」「また遊びに来てね」という温かい言葉が並びます。今までは、同じ敷地内であっても、園児と児童の交流は少なかったのですが、今回の体験をきっかけに、休み時間に4年生が幼稚園に気軽に遊びに来たり、人とのかわりに抵抗を感じていた児童が緊張せずに園児に笑顔でかわったりするなど、小学生にも変化が見られるようになっています。



※4年生から届いた園児への手紙

幼稚園の先生から

幼児は「雨の音」を雨の日のお散歩で実際に聞き、幼稚園での「あめ」の歌や4年生の群読を通してさまざまな言葉の表現にふれることができました。この体験が言葉への興味につながっていけばと思います。また、何よりも、4年生の迫力あるリズムの群読を聞いて、幼児は素直に「すごいなあ」という感覚とともに、あこがれを抱くことができたように思います。このような小さなあこがれの積み重ねによって、小学校へのあこがれの思いを膨らませていくのだと思います。

平塚幼稚園 きりん組 担任
山本 淳子 先生



小学校の先生から

4年生は群読を幼児に聞いてもらう場で練習の成果を出すことができましたが、幼児の歌を聞いた感想を表現することは、残念ながら十分にできませんでした。この学級の児童は、伝えたい気持ちはあっても声に出そうとすると小さな声になってしまう傾向があります。しかし、このような交流を通して、「聞きたい」、「伝えたい」という思いが少しずつ高まっています。最近では自分から「幼稚園に行きたい」と言う児童が出てきました。今、4年生が泥だらけになりながら幼児と遊んでいる姿を見てみると、今後の交流が楽しみでなりません。

平塚小学校 4年1組 担任
浅原 有果 先生



交流の事例からの考察

幼小連携を行う際、交流の内容や方法はさまざまあります。しかし、今回の事例のように「雨」という共通のテーマをもち、それぞれの発達に即した教材を選定し、同等の立場で交流することは、学び合うという視点から大きな意味があります。どちらか一方が受け身の立場にならないことで、互いに相手を尊重する気持ちを高めているのです。

また、交流にあたっては、幼児も児童も自分の「めあて」を明確にもって参加できるようにすることが大切です。幼児も児童も初めての体験ですので、教師の意図する方向にはなかなか進まないこともありますが、例えば、群読や歌を聞く前に

「雨の音を見つけよう」「何を想像したかな？」というように、めあてがもてるようにすることで、子どもたちは年齢にかかわらず意欲的に活動に取り組むことができ、成果も大きなものになります。

このように、幼児、児童とも、主体的に活動し充実感を体験すると、その体験を原動力として、教師が設定しなくても自主的に交流を進めるようになってきます。このことには、幼稚園と小学校の立地条件の影響もありますが、それよりも子ども同士の気持ちのつながりが大きいことがわかります。

(ベネッセ次世代育成研究所顧問・磯部 頼子)

●交流内容

図工 牛乳パックで 工作をしよう

現場の実践紹介②

幼小の“段差”を なめらかな“坂道”へ

子どもや教員が楽しめる交流活動を通して

ながつた幼稚園（横浜市）の幼小連携の取り組みの歴史は長く、今では同園や小学校にとって連携は不可欠な活動として定着しています。近年、新しいまちづくりが進む同地域において、幼小の交流活動は、地域の子どもたちや保護者同士がつながる機会としても大きな役割を果たしているそうです。公私立そして幼小の垣根を越えた取り組みはどのように行われているのでしょうか？

これまでの取り組み

04年度から取り組みが本格化

ながつた幼稚園といぶき野小学校が本格的な連携を開始したのは、04年度に横浜市教育委員会の「幼・保・小教育連携開発モデル校」（2年間）の指定を受けたことがきっかけでした。これを機に、異年齢の子どもの交流だけでなく、職員間や地域との交流活動も充実させてきました。指定校の期間が終了した後も、その取り組みは継続され、現在は4歳児と2年生、5歳児と1年生それぞれ年3回の交流を中心に行っています。

今回の交流活動について

9月30日、今年度2回目となる4歳児と2年生の交流が実施されました。内容は図工の教科交流で、次のようなねらいのもと、一緒に牛乳パックで工作をしました。

《4歳児》

- ・前回の交流で信頼を深め、仲良くなった2年生と親しみをもって楽しく交流する。
- ・初めての小学校に期待をもち、楽しく過ごす。

《2年生》

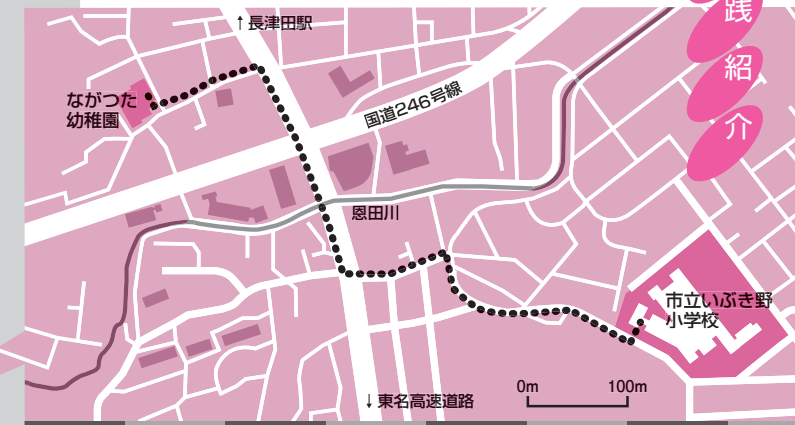
- ・交流を通して、園児に優しく接し、楽しく遊ぶことができる。



10:00

当日の様子

日時：2008年9月30日（火）
場所：小学校 各学級クラス



小学校へのお出かけはみんなうれしそう。小学校へは交通量が多い道もあり、園児の足で歩くと徒歩約20分の道のりがあります。この日は雨のため、園バスでの移動となり、150名の園児を運ぶためにバスは2回往復しました。



10:50

小学校に到着

小学校の多目的ホールに集合し、案内係の小学生を待ちます。初めて来た場所に、園児たちはワクワクしたような表情を見せながらも少し落ち着きません。



1回目の交流で作ったカードを見る子ども

前回の交流で一緒に遊んだカードをじっと見つめています。カードには自分の名前と1年間を通してペアとなる2年生の名前が書かれています。



一緒に教室へ

お兄さんやお姉さんに誘導されて教室に向かいます。



幼稚園

学校法人 長津田学園
ながつた幼稚園

キャッチフレーズは、「素敵な夢を持てる少女になるために」。広い園庭や室内温水プールがあり、子どもたちは元気いっぱい遊び、心身の健康や自立心をはぐくんでいる。

園長●森 慎互 先生
所在地●〒226-0027 神奈川県横浜市緑区長津田7-4-11
園児数●約445名（14クラス）



小学校

横浜市立
いぶき野小学校

2008年度は横浜市教育委員会より「パイオニアスクールよこはま」の指定を受け、新しい時代の要請に応じた教育の実現や地域の特性に応じた教育の提供を目指している。

校長●丸本 茂樹 先生
所在地●〒226-0028 横浜市緑区いぶき野14番地1
児童数●1121名（34学級）





作品を使って体育館で思いきり遊ぼう！

作品ができあがった子どもたちは、体育館に移動。牛乳パックで作ったパッチンと飛び上がるカエルの工作やフリスビーを使って、思いきり遊びました。

11:50



自分の相手と手をつないで帰る準備へ

一緒に遊んですっかりうちとけた様子。片手にはしっかり今日の作品を持って帰る準備をします。このあと、園児は体育館で持参したお弁当を食べて今回の交流は終了しました。(13:10に幼稚園に到着)

●後日、教職員反省会を実施(いぶき野小学校にて)

13:10



ハサミを使ってみよう

4歳児にとって、使い慣れないハサミで硬い牛乳パックを切るのは少し難しかったようです。なかなか切れずに戸惑う園児を見て、「ここはぼくが切るよ」、「手を切っちゃうから、ここ(ハサミの刃)は持っちゃだめだよ」など、弟や妹に話しかけるように、優しく聞きとりやすい口調で話しています。

▼ながつた幼稚園の掲示板
近隣の小学校や保育所と交換したお便りを掲載し、地域の様子を保護者に伝えています。



幼小は年に3回の交流を中心に。保育所との交流も

幼小連携の中心は4歳児と2年生、5歳児と1年生それぞれ年3回の交流です。毎年交流の大枠は、幼・保・小の園長・所長や校長をはじめとする10数名が参加する代表者会議で決定します。子どもや教員の負担を減らし、スケジュールを合わせやすくするため、現在は小学校と保育所はそれぞれに交流する、各活動の打合わせは1回にする、指導案は簡略に、などの工夫もしています。



小学生が歓迎の歌を合唱

11:00

最初はおとなしかった園児も「となりのトトロ」など親しみのある歌を小学生が歌うと、次第にリラックスした様子になっていきます。



小学生と一緒に工作をする園児たち

小学生が自分の席に園児を座らせて作業しています。ほかの学級の教室では、机は使わず自由に床に座って作るなど、学級によって取り組み方はさまざまです。



交流会の流れを黒板に掲示

「交流会でどんなことをすると楽しいだろう?」と、小学生が一生懸命交流の内容を考えました。



牛乳パックで作ったフリスビーに色ぬり

小学生の「どの色が好き?」などという問いかけに「ピンク!」などと答えながら色をぬっています。ペアとなる相手は年間を通して固定していますが、これには、子どもが回を重ねるごとに緊張がほぐれ、のびのびと個性を發揮するようになるというねらいがあります。

【幼・保・小 連携交流年間スケジュール (2008年度)】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
幼小連携			打ち合わせ①	交流会① (幼稚園で交流)	打ち合わせ②		交流会② (小学校で教科交流)			交流会③ (小学校のイベントで交流)		
			打ち合わせ①	交流会① (幼稚園で交流)		打ち合わせ② 交流会② (小学校で教科交流)				交流会③ (小学校のイベントで交流)		
幼保連携				交流会① (幼稚園で交流)					交流会② (小学校グラウンドで交流)	餅つき (幼稚園で交流)		
教員の交流	代表者会議① (年間のスケジュール確認)		代表者会議② (合同研修の打ち合わせ)	職員 合同研修会								代表者会議③ (1年の振り返り、次年度構想)

小学校からの声

年少の子どもに接することによって 子どもたちに表れる明らかな変化

幼小連携が進むに伴い、これまで、幼稚園の教育について、ほとんど何も知らなかったことに気付きました。以前は、落ち着きのない子どもを見ると、「もっと、しっかりと指導してほしい」などと、幼稚園に対して不満をもつことがあったのも事実です。しかし、何度も幼稚園に足を運び、教育の現場を見るにつれて、幼稚園は小学校とは異なる方針のもと、幼児期にふさわしい教育を提供していることを理解しました。

ながつた幼稚園との連携によって、子どもたちは明らかに変わりつつあります。小学校では、低学年は年下として扱われることが多いのですが、園児を前にした子どもたちは、ふだんとは異なる、“お兄さん”“お姉さん”としての顔を見せます。そのような経験を通し、「しっかりしなきゃ」という自覚や人を思いやる気持ちが芽生えているのは確かです。本校の児童は、文部科学省による全国的な学力調査では「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」「将来の夢や目標を持っている」といった項目が高くでていますが、これは幼小連携の取り組みとは無関係ではないと考えています。とくに、一人っ子の子どもにとっては、このように年下の子どもに何かを教える機会は貴重で、保護者の方々もとても喜ばれています。

いぶき野小学校では、同時に中学校との連携の充実化を図っており、幼稚園・保育所から中学校までを見据えた教育を提供できる体制を整えたいと考えています。同時に、地域社会との協力関係を強化するなど、広い視野をもった取り組みを充実させていきます。



いぶき野小学校 教務主任
能登 正明 先生



ながつた幼稚園 教務主任
小山 哲央 先生

お話をうかがいました



幼稚園からの声

教育方針の違いが最初の壁 交流を通じて子どもや教員に変化が

交流をはじめ、最初に驚いたのが、子どもの育ちに関する幼稚園側と小学校側の考え方の違いでした。幼稚園側が「少し手を貸せばたいはいのことはできる」と考えるのに対して、小学校側は「手を貸さなければ何もできない」と評価する。お互いの教育の方針や内容について、ほとんど知らなかったのだと思いました。手探りで進めてきた交流活動でしたが、園児は小学生に優しく教えられ、「小学生は優しいな」「自分も、ああいうふうになりたいな」といったあこがれの気持ちが芽生えているようです。そして、交流の感想を聞くと大半の園児が「楽しかった!」と口をそろえます。「小学校は楽しいところ」という印象をもって入学すれば、その後の意欲や姿勢に好影響が生じることは想像に難くありません。

また、一連の交流活動は保護者にも喜ばれています。「自分の子どもは小学校でやっていけるだろうか」という不安は、多少なりとも、多くの保護者が抱いているものです。小学生との交流について楽しそうに話す子どもの姿は、保護者を安心させているようです。

教員自身の変化もありました。とくに若い教員の成長が著しく、経験豊富な小学校の先生方と、教育について対等に話そうとする努力が成長につながっているようです。

小学校の学習を先取りして教えるのではなく、園児が小学校の中に入って見せてもらうことによって、私たちは、本来、幼稚園がすべきことに専念できると考えています。

まずは接点をもつこと そして教員自身が楽しむこと

まずは小学校との接点をもつことが大事でしょう。私は、小学校や保育所に園だよりを持参することから関係づくりを始めました。幼小連携は、開始当初こそ、苦労が多いものの、次第に子どもの変化などが表れ、喜びが勝るようになってきます。だから、最初ががんばって、後は教員自身が小学校の教員との交流を楽しみながら、“気楽”な気持ちで臨むと良いと思います。幼小連携が軌道に乗って子どもが生き生きと楽しむ様子が見られれば、本当に有意義な活動であることが実感できるはずですよ。

ベネッセ次世代育成研究所について

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

調査結果をホームページでもご紹介しています。

発刊物・調査結果の無料ダウンロードや、詳細な報告書の購入申し込みができます。

シンポジウム等の最新情報は、ホームページをご覧ください。



発刊物のご紹介

「これからの幼児教育を考える」バックナンバーや、幼児の遊びにみられる学びの展開を事例集にまとめた「学びの芽」が無料でダウンロードできます。

調査・研究のご紹介

幼児教育・保育についての基本調査、乳幼児の父親調査、乳幼児のメディア視聴に関する調査結果などが無料でダウンロードできます。

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

(各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください)

これからの幼児教育を考える

2009 春号

2009年1月20日発行

発行人：新井 健一

編集人：後藤 恵子

印刷・製本：(株)協同プレス

企画・製作：ベネッセ次世代育成研究所

デザイン：森一典デザイン事務所

執筆協力：二宮良太

撮影協力：ヤマグチイッキ

発行所：(株)ベネッセコーポレーション

〒101-8685

東京都千代田区神田神保町1-105

神保町三井ビルディング

TEL.03-3295-0294

© ベネッセ次世代育成研究所 無断転載を禁じます。

編集後記

今回は幼稚園教育要領の改訂の大きなポイントのひとつでもある「幼小連携」を中心にご紹介しましたが、いかがでしたか？ 取材にうかがった園に、小学校との交流による変化を尋ねたところ、「まず、先生が変わった」という答えが返ってきました。交流を通して、お互いの保育・指導の目的や背景を知合うことで、子どもの見方や接し方が変わってきたというのです。そして、子どもたちがお互いを信頼して、本当に楽しそうにしている様子を見ることが、幼小の交流活動を続けていく原動力になっているとも教えていただきました。幼稚園から小学校への移行をなめらかにする中で、子どもたちが互いの交流から学び合う関係をつくるのが大切と言えます。同時に、先生同士も学び合う関係が不可欠なのだと感じました。(杉田)